

# 第65回 ハニー・ナイツと 平浩二の「甘い」関係

昭和の時代のチョココレートのマシンといえ、上原ゆかりがかわいらしかったマーブルチョコの歌と、タイガース時代の沢田研二が歌っていた「チョココレート、チョココレート」がすぐに思い浮かびます。マーブルチョコを歌っていたのは、久里千春とハニー・ナイツという男性ボーカルグループでした。昭和30年代まで、コマソン歌手の中心にいたのは楠トシエで、男性コーラスではダーク・ダックスとボニー・ジャックスが存在を示していたのですが、40年代になるとハニー・ナイツが台頭してきます。

昭和44年に一世を風靡した丸善石油のコマソンを、はつまかな(後の、しばたはつみ)と一緒に歌っていたのも彼らでした。

「オー、モーレッツ」が流行していた同じ頃、私は深夜放送で耳にした『オー・チン・チン』というユーモアソングを歌っているのがハニー・ナイツというグループだということを知ることになるのですが、彼らとモー

レッツの小川ローザが結びつくことはありませんでした。

彼らの存在がメジャーになったの

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎  
絵・松本浦



は、昭和45年から始まったエメロンクリームリンズの「ふりむかないで」のCMでしょう。札幌、東京、名古屋、大阪など日本中をロケして後ろ姿の若い女性に声をかけて振り向かせるという趣向は、男性の覗き心をくすぐる効果もあり、リンズの普及と歌のヒット、そしてハニー・ナイツの知名度アップに寄与します。

そして、一躍「葵まさひこ」の名

を歌謡ファンに知らしめたのは、昭和47年、平浩二に提供した『バス・ストップ』(詞・千家和也)でした。平浩二は昭和44年、20歳の年にデビューしますが、翌年に西田佐知子の『女の意地』をカバーして同曲のリバイバルブームに一役買った以外は目立った活躍もなかった時期にこの曲に出逢い、人気歌手の仲間入りになります。作詞家・千家和也の織り成す「別れ話の映像化」に磨きがかかってきた頃です。

残念ながら作曲家・葵まさひこは昭和59年、47歳で早世しますが、彼の作品には自らの青春時代に親しんだ音楽を再現するかのようなオールディーズ風の曲がいくつもあり、あの楽しさを今の歌謡ファンに味わわせたい、という確信的な心境が感じとれたものです。

平浩二の『バス・ストップ』『夢物語』はプラターズの『オンリー・ユー』『ニール・セダカの『恋の日記』を彷彿させ、ミミ(後のミミ萩原)の『おしゃれな土曜日』『恋人たちの森』、サンディー・アイ(後のサンディー&ザ・サンセット)の『くちづけは許して』などの旋律・コーラスにはオールディーズのエキスがたっぷり詰まっています。